

# 三浦直彦についての研究ノート

——内務省入省まで——

山田潤治

## 機縁

私が、三浦直彦の調査を開始したのは、三浦が江藤淳の岳父である、という機縁によつてである。三浦直彦は、江藤淳夫人であつた江頭慶子さんの父である。慶子さんについて、私には忘れられない個人的記憶がある。

一九九三年、私は慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスで、三年生となり、江藤淳のゼミに所属していた。同年四月からスタートしたゼミも、年の暮を迎える頃には、先生と十五人ほどのゼミ生の間もすっかり親密なものとなり、ある日、鎌倉西御門にある先生のご自宅に、皆で押しかけようという相談になつた。今となつては随分迷惑な話だつたと思うが、無理を要求された先生は、特段の逡巡もなく、「では、今度、一度いらつしやい」とご快諾くださった。その後、何度も西御門の御宅にかよつたが、この時が私にとつて、最初の訪問となつた。それから西御門を訪れるまでの期間は、心躍る時間であつた。尊敬している先生がどのような生活を営んでおられるのか、どのような空間で先生の作品が生み出されているのか、先生が日常、どのような書籍に囲まれておられるのか、は無論のこと、世評に高い文芸批評家の家と家族がどのようなものであるのか覗き見てみたいという、俗物根性の発露が幾分かあつたことは否定すべくもない。

十二月の某日、先生の自宅を訪れたわれわれはいくつかの意味で、期待を裏切られた。まず、第一にその生活様式である。江藤淳は保守思想家で伝統主義者、かつ厳格な大学教授（時折茶目つ気が発揮されるもの）という先入見がわれわれにあり、日常の先生は、日本家で和服を着てすごしておられるようなイメージをもっていた。無理もない。そうわれわれに思わせるだけの風格が先生にはあつた。実際に目にしたご自宅は、洒落た洋館風のつくりで、ダイニングとリビングは、スキップフロアとなつ

ており、リビングには暖炉があり、セントラルヒーティング。二階へあがる階段（いや、二階から降りる、と表現したほうが的確かもしれない）は二階階段。トイレをのぞくサニタリーは、一面のガラス張りであつた。「スキップフロア」の言葉すら知らなかつた当時の私は、その洋風生活に相当の衝撃を受けた。唯一、貴、座椅子に文机という先生の書齋と前庭、2階の衣装部屋のみが和風であつた。

もうひとつ驚いたのが、慶子夫人の装いであつた。てつきり和服のご婦人が登場するものと、勝手に想像していたが、実際の慶子夫人は、小柄で痩せ型、コケティッシュで華やかな女性であつた。黒のワンピースで、短めのスカートの裾がひるがったいでたちで、玄関でお顔を出されると同時に、場が華やいだ。その場の雰囲気は、いかんとも名状しがたいが、江藤先生が制御している「保守思想家江藤淳」イメージを、一瞬にしてつきやぶつてしまうような、華やきが、慶子夫人にはあつた。

その後の、場の中心は、完全に江藤夫妻のものであつた。先生一極ではなく、先生と慶子夫人が話題の中心であつた。この夜の、慶子夫人の話題は、記憶に残る点が多く、先生のそれまでの系譜・エピソードを多数教わり、とても興味深いのだが、この論考で私が触れようとしている点にのみかぎって話を二つだけ抽出しておきたい。ひとつは、慶子夫人が小さい頃、大連あるいは新京の官舎に、多くの文人画家達が訪れたということ。なかには、淡谷のり子や李香蘭らがいいたという。もうひとつは、慶子夫人が阪神タイガースのファンだということ。杉下茂のファンであつた先生が、中日ファンであるのに対して、慶子夫人は、「自分は和歌山人、関西人だから」タイガースファンだとおっしゃつたこと。慶子夫人は、満洲で育ち、敗戦後は、鎌倉、東京で過ごしたので、和歌山に居住したことは一度もないはずである。にもかかわらず、自分は和歌山人というアイデンティティが強かつた。

一九九三年以降、先生がなくなった九九年までのあいだ、何度か、鎌倉西御門や軽井沢千ヶ滝の別邸へうかがったが、江藤淳の生活を実際に目にする、やはり、慶子夫人の出自を考えずにはいられなかった。生活の随所にちりばめられたコロニアル様式からは、どうしても満洲国の影を直感せずにはいられなかったのである。

### 本研究ノートの意義

さて、本論考の位置づけについて一言しておきたい。本論考の出発点は、文芸批評家江藤淳の研究外伝である。江藤夫妻は、生前「一卵性夫妻」とも称されたが、その性格その他はいざしらず、出自・育ちについて共通項が多い。江頭家、三浦家（須藤家）ともに、明治以前は、雄藩の士族であったこと、戦前の帝国日本において、支配階級に属した一族であったこと、また個人では幼くして母親を亡くし、その後の父親の再婚にともない、多感な時期に、継母を新しい母親として迎えたこと、戦争によって、生まれ育った家を失い、一家の社会的地位を喪失したこと。江藤淳の戦後における自己回復の物語は、江頭慶子の物語でもある。江頭慶子の父、三浦直彦の生涯の一端を明らかにすることで、江藤淳の伝記的研究に資するところがあれば幸甚である。

本論考のさらなる目的は、内務官僚三浦直彦（大正十一年入省）の足跡を明らかにすることである。内務官僚の系譜でいえば、三浦は、いわゆる「革新官僚」として知られた長岡隆一郎（明治四十一年入省、関東局初代総長、満洲国総務庁長、湯沢三千雄（大正元年入省、東條内閣の内務大臣）、武部六蔵（大正七年入省、関東局三代総長、満洲国総務長官）の系譜につらなり、政党偏党化した内務省においては、政友会系と目された人物である。官僚としての履歴において、回帰点となったのが、五・一五事件である。事件後、政友会系であった犬養毅内閣にかわって、政党に依らない齋藤實に大命降下、内務大臣には、十日間の暗闘があつたすえ、憲政会系の山本達雄が就任した。政友会系の内務官僚は、慣例通り左遷されたが、とりわけ、一国の首相を殺され面目を失った警保局責任者への人事異動は熾烈を極めた。河原田稼吉（内務事務次官）、大野緑一郎（警視総監）、松野鶴平（内務政務次官）、森岡二郎（警保局長）、三橋孝一郎（警保局保安課長）、武部六蔵（内務省秘書官）、横溝光輝（内閣官房総務課長）、桑原幹根（警保局図書課長）、三浦直彦（衛生局保健課長）らは、みな異動させられることになった。警備上の責任はともかく、警保局は、選挙取締の総本山であったため、とくに敵視された。武部は、秋田県知事へ転出、三橋は休職、桑原は、鳥取

県書記官へ転出、三浦は、徳島県書記官へ転出となった。武部は少壮四一歳での知事就任であり栄転と言つてよいが、他はみな左遷であった。のちに、武部が、自身の日記で次のように書いている。

昭和十二年二月一日（土）

河原田氏の内相は嬉しい。大野（緑一郎）、森岡（二郎）、三橋（孝一郎）、吾輩、三浦（直彦）、桑原（幹根）、横溝（光輝）等あの当時苦楽を共にしたもの皆浮かび上つた。<sup>1)</sup>

記事は、林銑十郎内閣に河原田稼吉が内相として入閣するとの報をうけて執筆されたものだが、武部が言う「あの当時」が、五・一五事件前後であることはまちがいない。とりわけ休職を命じられた三橋の再就職については、大野や河原田が随分骨をおつたようであり、国会図書館憲政資料室の大野緑一郎文書にも、三橋の就職を頼む書簡が残されている。

彼ら内務官僚は、昭和十二年、「皆浮かび上つた」わけであるが、ここで問題にしたいのは浮上の内容である。五・一五事件で政党内閣および二大政党制は終焉をむかえ、彼らは、政友会系官僚として、内務省内で再浮上したわけではなかった。「浮上後」の彼らの立場は、大野が、長岡隆一郎のあとの関東局総長を経て朝鮮総督府政務総監、森岡が、台湾総督府総務長官、三橋が朝鮮総督府警務局長、武部が大野のあとの関東局総長、三浦が関東局司政部行政課長、桑原が内閣調査局調査官、横溝が情報委員会事務官兼内閣書記官、であつた。つまり、五・一五事件後、長岡、大野、森岡、三橋、武部、三浦は、植民地官僚として、第二の官途を歩み始めたということである。加えて、彼らの政策立案の傾向を考察するにあたっては、彼らが革新官僚の系譜につながる官僚であることを銘記せねばならない。彼らが《派閥》を形成するにあたっては、2つの極があつたことを指摘しておこう。長岡、河原田、三浦らは、健康保険制度の整備で苦楽をともにした。一方、大野、武部らは、関東大震災後、復興局で苦楽をともにした同僚であつた。

植民地行政において、計画経済・計画行政型、誤解をおそれずにいえば、社会主義的政策を推進しようという傾向を有する官僚たちが、政党政治終焉後、どのように身を処したか、とりわけ植民地行政における軌跡を追うことで明らかにするものは多いであろう。ただし、私は、ことさらに三浦や周辺の内務官僚たちを「新官僚」あるい

は「革新官僚」として、その軌跡を定式化し、その傾向を分析しようというのではない。それは私が依拠する文学的研究ではないし、また、ひとりの近代人としての三浦の本質をあきらかにするものではない。革新官僚の一例として三浦を分析するのではなく、あくまでも三浦直彦の研究であることを、強調しておきたい。

### 系譜

三浦直彦は、明治三十一年（一八九八）年三月三十一日、和歌山県土族須藤<sup>すとう</sup>丑彦の三男として、和歌山市玉藻丁（現、和歌山市吹上四丁目二番地）にて出生。玉藻丁は、和歌山城の直線距離で1kmほど南にあり、かつて親藩紀州藩の武家屋敷がならんでいた一角である。

三浦の父、須藤丑彦は、和歌山県の教育界に足跡を残した教育者として名高い。すでに撤去されたものの、昭和十年九月より、長らく、和歌山城下に、須藤の業績を顕彰した銅像が鎮座していた。銅像建立の際に編纂された『須藤丑彦先生胸像建設記念誌』（川島庄一郎編）に掲載されている略年譜によれば、須藤丑彦は、父須藤暢、母升の子として、元治元年（一八六四）五月二十六日に和歌山市玉藻丁一丁目八番地にて出生となっている<sup>2</sup>。元治元年は、甲子の年にあたるので、丑彦という命名と照合すると、実際は、乙丑の年にあたる、翌慶應元年（一八六五）の生まれだと考えられる。明治十二年三月に和歌山中学校が開校になり、同年、同校に入校。一期生として、南方熊楠らと席を並べた。成績は中位であった。南方熊楠の明治十四年の日記<sup>3</sup>によると、四月三十日の席次は、十七人中、熊楠が六番で、須藤が七番であり、六月一日の席次は、十六人中、須藤が六番、熊楠が十番である。中学校帰りに、熊楠が、須藤家を訪れていたことが、熊楠の日記に記録されている。日記に登場する同期生の氏名からは、丑之助、丑三郎、寅之助など、慶應元年から三年の生まれが多いことが推察される。和歌山中学校の、明治十六年三月の卒業生は、南方熊楠等五名である。このなかに、須藤丑彦の名は含まれない。在学中の明治十五年、父須藤暢が逝去したためである。丑彦の下には、明治十年三月生まれの弟順次郎がわずか五歳であり、父にかわって丑彦が働かなくてはならなくなった。十五年九月四日付で、海草郡鹽屋小学校、翌年一月には、和歌山市吹上小学校の訓導として採用されている。年齢のサバ読みは、この折のことと推定される。玉藻丁の屋敷を離れ、順次郎を連れて池田町へ転居した丑彦は、小学校の訓導として教鞭を執りながら、開校したばかりの和歌山県師範学校へ

入学し、明治十九年七月、高等師範学科を優等な成績で卒業、卒業試験の際、唐宋八大家読本を賞与されたという。翌二十年三月、那賀郡三谷小学校三等訓導兼校長に任じられ、以後十四年間同校に勤務した。その間、明治二十五年、竹友直枝と結婚、弟順次郎と三人の男子を訓育した。三十三年四月からは、和歌山県海草郡視学、四十年四月からは、県視学、四十五年四月からは、市立和歌山実科高等女学校校長をつとめた。『教育家銘鑑』によれば、「部下職員各自の人格を尊重」し、「直接苦言を以てするなく、自分の教育方針を明確に示して、教育を徹底したため、「人望高」かったという。また、当時移入されたばかりの活動写真等の興行物の材料を採用し、これらを改善して教育に用いたというから、進取の精神に富んだ人物であったようである。そのほか、和歌山県立図書館開設準備委員として図書館開設に尽力した、和歌山県誌編纂に尽力した、など和歌山県の教育行政に貢献があり、昭和六年には、和歌山市教育会長に就任、昭和九年九月九日に逝去した。

須藤丑彦と南方熊楠の友情関係は、十代の一時期、相当に親密なものであったらしい。残された熊楠の日記から、とりわけ、明治十九年（一八八六）ごろに、須藤の名が集中して登場することがわかる。明治十九年は、熊楠は、大学予備門で落第して和歌山に帰郷、その年の暮れの十二月に、渡米するという年であり、須藤にとっては、師範学校を卒業した年にあたり、翌年、和歌山城下玉藻丁の屋敷を離れ、都賀郡池田町へ転居する直前の次期である。両者とも、新世界へと飛躍する節目の年となったが、和歌山で、ふたりは連日のように出合っている。熊楠が須藤を訪問することが多かったようだが、九月二十九日、「朝須藤丑彦氏来訪。午後須藤氏を訪ふ<sup>4</sup>」にはじまり、九月三十日、十月五日。六日は、「午後須藤氏と俱に和佐山高ノ御前にのぼり眺望す。共に帰る」とある。七日、八日、九日、十一日、十二日、と「須藤氏を訪ふ」が続く、十月十三日、熊楠にとって念願であった、渡米の許可が、父兄よりおりる。十四日は、二人で吉川村へ、十五日は、湯浅へ行って、熊楠は、渡米の挨拶をするため友人めぐりをし、その間、須藤は御坊へ行っている。二十日、ふたたび行動をともにし、二十一日は、須藤を含む友人たちとの送別会。二十六日は、和歌山新聞に広告を出しての送別会が開催され、翌二十七日、熊楠は和歌山を離れ、渡米準備のため東京への帰路についている。

二人は、三日とあけず会合をもっているが、熊楠にとって、和歌山をしばし離れる重要な時期であり、渡米の許可を父親から受けるための相談を須藤に向けていたことは想

像に難くない。二人が次に再会するのは二十五年後の一九一一年であるが、須藤が熊楠の青春期において、重要な位置を占めた人物であったことはまちがいないようである。

また、須藤家にとっても、熊楠が度度来訪したことの意味は小さくない。熊楠の日記に、「コウルバイ乾葉一枚」「須藤丑彦氏園内所生也<sup>5</sup>」とあり、和歌山中学から徒歩5分以内の位置にあつた須藤宅が、熊楠にとつて重要な植物採集地であつたことはエピソードとして重要であるが、当時九歳であつた須藤の弟、のちの医学博士島蘭順次郎に、自邸で植物採集する熊楠の姿が、どのような印象を残したか、こちらも銘記しておく価値は十分あるだろう。

須藤丑彦の、自身の子弟の教育については、弟順次郎は、和歌山中学校に進学、成績優秀で、第一高等学校へ入学、東京帝国大学医科へ進学し、明治三十七年大学を卒業。その間、島蘭恒齋の養子となり、島蘭姓を名乗る。日露戦争の際は、志願して軍医となり、戦傷者の治療に従事した。戦後は、大学に戻り、ドイツへ留学。大正三年、医学博士となり、同十三年、東京帝国大学の教授となり、脚氣の原因がビタミンB1の欠乏であることを突きとめるなどの功績を残し、和歌山産を代表する人物となつた。長男光彦も、叔父島蘭順次郎同様、医学の道を志した。第三高等学校、京都帝国大学医科を経て、京都市三条富小路下ルの地に、内科医院を開業、開業医として生涯をすごした。

次男武彦は、隅田家の養子となり、隅田の姓を名乗つたが、兄同様、第三高等学校から京都帝国大学へ進学、化学技術を専攻した。満州事変以降、繊維材料の不足から、繊維生産は、国運興隆の要の産業となつていくが、隅田武彦は、京都大学において、人造繊維の研究に専心し、昭和十五年、堀尾正雄との共同研究で、二浴緊張熱固定による捲縮スフ(ステープル・ファイバー)の現場生産に成功、化学工業技術発展に貢献した。終戦当時、日本油脂繊維部徳島工場の工場長をつとめるなど、生産現場でも活躍、帝国繊維(のち東邦レーヨン)の役員をつとめ、昭和三十一年度第五回化学技術賞(日本化学会)を、堀尾らとともに受賞している。隅田は、また、金光教信仰に傾倒、教義に熱心に帰依し、金光学園長、金光学園高校校長を務めるまでになつた。

本研究であつかう、三浦直彦は、須藤丑彦の三男として生まれたが、須藤家、島蘭家ともに、理系の医師や技術者、研究者が多いことに強い印象を受ける。一族のなかで、三浦は、高等文官試験を受けて官界にはいった異色の存在といふことができる。

島蘭順次郎の子息女(三浦の従兄弟にあたる)は、長男順雄は、医学博士・東京大学名誉教授、次男平雄は、農林省につとめ、農学博士。三男安雄は、医学博士・東京医科歯科大学名誉教授。長女正子は、地震学者の坪井忠二と結婚、次女文子は、東京大学医学部長であつた高橋忠雄と結婚、三女しづは、タケダ製薬創業家の武田敬之助(武田長兵衛の息子)と結婚、四女千代は、日本プレスコンクリート社長の堀武男と結婚、とそろつて理系の系譜である。

三浦だけが、科学と無縁の世界に進んだことは、三男末っ子であつたことに起因する。これは、三浦の次男雄次氏の証言によるが、三浦直彦、妻滋子<sup>9</sup>ともに兄弟の末子で、末っ子同士の結婚であつたため、「ねばならない」という気風が家族内にまつたといつてよいほどなかつたという。おそらくは、須藤丑彦や、長男須藤光彦には、嫡流としての足枷が職業選択においてあつたことは間違いないが、三男の直彦には、特段の足枷はなかつた。無論、これは、明治日本においては普遍的な現象であり、須藤家にかぎつたことではない。

さて、明治三十一年生まれの三浦直彦は、明治四十二年(一九〇九)に、父や兄と同様、和歌山中学校に入学した。中学校、高等学校と、野球に熱中、ピッチャーとして活躍した。当時、旧制和歌山中学校(現、和歌山桐蔭高等学校)では、野球熱が強かつたものの、一方、世間一般では、野球を不良の遊びと冷淡にみる風潮があつた。明治四十年に赴任した成富校長は、スパルタ式教育を実施しようと野球禁止令を出し、和歌山中学野球部は、練習らしい練習もできずにいた。大正二年春、三浦が十五歳の時に、野村浩一校長が赴任すると、「運動、特に野球は物心両面から学生を訓練する」として、校長自らアンパイアをつとめるほど、野球に力をいれ、早稲田大学野球部主将で大学を卒業したばかりの大村隆行をコーチに招聘し、練習方法を一変させた。大正二年の冬休み、三年の春休みとふたりの慶應義塾大学野球部のコーチを招聘、ユニホームを作成、急速にその実力を高めていった。同年十月には、大阪の名門市岡中学と対戦し同校を撃破、第三高等学校主催の関西野球大会では、愛知県の高岡岡崎中学を七〇で破り、和歌山県の強豪チームとして世間に認知されるにいたる<sup>10</sup>。

三浦は、カーブを得意としたという。のちに、三浦が満州に渡つた後、時折、子息たちとキャッチボールをする機会があつたというが、次男雄次氏は、「おやじは、中高と野球部だつたことをよく自慢していたが、キャッチボールでよくいじめられた」と話す。当時、小学生だつた雄次氏とキャッチボールが続くと、三浦は、カーブを投

げはじめ、ボールが雄次氏の手元ですつと変化してとれないと、三浦は怒ったという。三浦の頃の変化球といえ、カーブかドロップ、懐かしそうにキャッチボールのエピソードを話す雄次氏の表情からは、三浦の父親としての厳しさと野球選手だった中高時代への矜持がかいま見えた。

大正四年（一九一五）、三浦は、兄二人の後を追って、第三高等学校へ入学する。三高でも当初は、野球に熱中するものの、三浦の関心は、徐々に「社会」問題へと移行していく。当時の高等学校野球といえ、一高三高の対抗戦が人気を集めた時期である。三高野球部で花形選手として活躍した、古海忠之（キャッチャー。三浦の二年後輩）は、敗戦時、満洲国において、日本人官僚トップであった武部六蔵総務長官の右腕として活躍した。在満関東局長であった三浦とは、ともに武部を支える存在であった。また、昭和二十年、沖繩県知事として沖繩戦で殉職した島田勲も、三高野球部で活躍したが、島田は、内務省の後輩でもあり、三高人学、内務省入省（大正十四年）ともに三浦より三年下である。一高三高の対抗戦の記録を確認したが、公式記録のメンバー表に三浦の名前はあらわれない。古海や島田の華々しい活躍に比べると、三浦が三高時代、野球にのめりこんだかどうか定かではないが、先述の三浦雄次氏の証言によれば、新車で、頻繁におこなわれた一高三高のOB対抗戦に、三高側選手として出場していたといい、三高野球部に在籍していた可能性は高い。

### 青年期の思想

三浦が第三高等学校に入学した大正四年（一九一五）は、前年に第一次世界大戦が勃発し、国内でもいわゆる大正デモクラシーの風潮がひろがった時期である。大正デモクラシー下の青年の例に漏れず、三浦は、その「社会」思想に傾斜していく。また、「社会」という言葉が色眼鏡で見られていた時代である。当時、三浦がどのような思想的傾向をおびていたかを明確に示す文章が、雑誌『我等』の読者投稿欄「こだま」に残されている。少し長くなるが、時代の風潮と三高当時の三浦の思想がよくわかる文章なので、引用・分析しておきたい。

吾々學生の最も有力なる指針であつた『大阪朝日』の忽焉たる變轉は、吾々の憧憬と信賴の強かつただけそれだけ深く失望と驚愕とを禁じ得なかつた。……（中略）

所謂武裝的平和の上に立つ十九世紀の文明は今次の歐洲戰亂により根本的に破壊せられその全く虚偽の平和であつた事が愈々明白になり、こゝに恒久的平和を維持せんが爲めに世界は新たに改造せられつゝある。……（中略）……世界の風潮は、デモクラシーより他に何も認められない。國內の安寧と國力の充實とは個人的自由と社會的平等に基くデモクラシーに依るの他なく、世界の平和は國際間の正義人道に基かねばならぬ事には今や一點の疑を挟む餘地は無い。目下の日本青年の大多數は勿論此思想は共鳴するもので僕も亦其一人である。殊に自由の校風の下に育つた僕には一層新思想に對する敏感な受容性があると同時に其の絶對的必要を感じるのである。僕には個人の人格を蹂躪し個性を無化する支配の下には一瞬時でも生活する事が困難であり、又假令忍んで生活しても決して之れに價値を附する事が出来ない。

「青年の共鳴する思想」と題された投書であるが、大阪朝日新聞の「忽焉たる變轉」とは、白虹事件後の大阪朝日新聞の失速を指している。寺内正毅内閣のシベリア出兵と米騒動への対応をめぐって、大阪朝日新聞は、社長村山龍平以下、鳥居素川編集局長、長谷川如是閑社会部長らを中心に、民本主義を標榜する言論展開のもと、政府攻撃言論の急先鋒をとっていた。大阪朝日新聞に依つた記者たちが民本主義を信じたのは、陸羯南の思想が背景にあつたと、『大衆社会化と知識人——長谷川如是閑とその時代——』で古川江里子は論じている。古川によれば、「陸羯南の、國民の幸福によつて日本の独自の文明的利点が保持されることによる世界文明への貢献という究極的な目標の達成のため」に、國民がみずからの幸福を達成するための政治参加を説くという民本主義が、白虹事件までの大阪朝日新聞の主潮流であつた。大阪朝日新聞は、民衆の広範な政治参加を唱えたが、それを実現すべく、对中国政策、シベリア出兵といった帝國主義的政策から、米騒動まで、寺内内閣の政策を徹底批判し、一方、政府は、発禁処分を含む強硬な姿勢で対抗した。頂点が、大正七年（一九一八）八月二十六日付夕刊に掲載された「白虹日を貫けり」という内乱予兆を意味する故事成語を用いた記事をめぐる政府の言論弾圧であつた。同表現が不穏当なものであるとして、新聞紙法に抵触するゆえに、大阪朝日新聞は発禁禁止の行政処分をうけ、同日、発行禁止を目的として告発された。初公判の三日後には、社主の村山が右翼黒龍会会員から襲撃されるという事件をも誘発し、大阪朝日新聞は、この言論弾圧に屈するかたちで、事態の収束をはかることになつた。編集局長の鳥居、社会部長の長谷川が責任をとって退社、

大阪朝日新聞の民本主義的論調に同調してきた読者は、大きな失望をあげた。

無論、三浦もそうした読者のひとりであり、彼が、大阪朝日新聞から民本主義的社會觀の洗礼を受け、それを支持していたことが、先の引用からはつきりとわかる。「武装的平和」にかわって、「デモクラシー」が世界の風潮となっていくことはもとより、「國內の安寧と國力の充實とは個人的自由と社會的平等に基くデモクラシーに依るの他なく、世界の平和は國際間の正義人道に基かねばならぬ事には今や一點の疑を挟む餘地は無い」とは、長谷川如是閑らが、大阪朝日新聞で展開し、またその後、雑誌「我等」で展開しようとした主張にほかならない。まずは、個人的自由と社會的平等に基礎をおき（民本）、それが、国家・國力の充実につながり、世界の安定へとつながる、というのは、三浦自身の主張というよりは、長谷川如是閑ら大阪朝日新聞記者たちの主張である。ここで、重要なのは、三浦の思想の個別性ではなく、第三高等学校生の三浦が長谷川らの主張に完全に同調しているという事実を確認しておくことである。三浦は言う、「日本青年の大多數は」「共鳴」しており、「自由の校風の下に育つた」「僕も亦其一人である」と。自由な校風とは、和歌山中学および、三高のそれを指すのであろう。三浦は、たしかにのちに在滿洲國の関東局局長となり、日本の在外植民地行政の頂点にのぼった人物であるが、根本思想に民本主義があったことは忘れてはならない。植民地官僚たちが、かならずしも帝国主義的思想を有したわけではない。三浦のように、大正デモクラシーに強い影響をうけて自己形成をおこないつつ、植民地行政において自己実現をはかろうとした人物が矛盾を抱えていたわけではない。その不可思議さについては、三浦の滿洲入後の事績を追いつつ、議論を進めていこう。

三浦の投書が掲載された「我等」は、大阪朝日新聞を退社した長谷川如是閑と大山郁夫を編集人として、大正八年（一九一九）の紀元節に創刊された雑誌である。デモクラシー（民本主義）をイデオロギーの中心に置いていた点は、大阪朝日新聞とかわりないが、決定的に異なるのが、大阪朝日新聞が、新聞であったのに対し、「我等」が同人雑誌であったというメディア特性のちがいであった。雑誌「我等」は、新聞のように広範囲な主張の流布と即時性という特性はもちえなかったが、他方、より焦点を絞り込んだ層の読者を確保し、読者の理解を諄々と涵養していく可能性が開けていた。ひとつの方策が、高等学校生徒ら青年知識階層へのイデオロギー浸透であった。「我等」創刊号の編集後記には、「青年学生の寄稿欄を新設し、一方に於て諸君の真実なる精神的、思想的共助者たると共に、他方に於て幾多無名の少壮思想家、青年論客

を世上に紹介するの仲介者となり度いと思つてゐる」と述べられ、「我等」が読者に大きな期待を寄せていたことがうかがわれる。実際、「我等」の目的に合致した理想の受容態度を示したのが、三高学生三浦直彦の投書であった。雑誌「我等」の読者投稿欄「こだま」に三浦の投書が掲載されたことは、将来、日本社會の指導的地位にたつ若い学徒に、デモクラシーの思想を植え付けるといふ長谷川や大山の意図を如実にあらわしているのである。

三浦の投書「青年の共鳴する思想」が掲載された「我等」第一巻第三号に、長谷川如是閑は「傾向及批判」という論文を執筆している。冒頭に「智的奴隸としての少壮官僚」というタイトルが付されていることから明らかだが、大正デモクラシーの洗礼を高等学校、大學時代に受けた若い官僚たちの覚醒をうながす内容の論である。三浦に代表される、大正年間に官界に入った官僚たちに、大きな影響を与えた論である。

社會において生活する以上、われわれ人間は社會的形式と個人的傾向との二重生活から逃れることはできない、としたあと、長谷川は、官僚となる青年の二重性に言及する。「今日の高等教育を受けた青年が、官僚の生活に入つて行くこれまでの学校や研究から得た智識、それから涵養された思想感情を甚しく裏切つた生活を強められなければならない」という。彼ら若き官僚が、みずからのうけたデモクラシー教育と封建的屈従のはざままで「内的苦悶を抱いてゐるか」と長谷川は問う。少壮官僚もやはり「市民」であり、「良心の威厳」を保持しなくてはならならず、「智的奴隸としての地位に甘んじてゐることについて痛烈に良心の呵責を感じねばならない筈である」と断じ、少壮官僚が、私的生活を公的生活へと拡大させること、公私生活を合一させることによつて、自他を救いうる、と結論している<sup>15</sup>。換言すれば、長谷川は、公的生活を私的生活に従属させる封建的社會責任を轉換し、開明教育で啓蒙された私的信念を公的生活に反映させることで社會改良を追求すべきと主張したのであり、当時の学生たちに広く受け入れられた。事実、三浦のその後の官僚としてのあり方は、長谷川の期待した通りの軌跡を描いていくことになる。ただし、五・一五事件で、三浦の官僚人生は一変することになる。

三浦は、雑誌「我等」創刊と同じ年、大正七年（一九一八）、上京し、東京帝國大學法学部法律学科（仏法）に入学する。すでに三高を卒業する頃には、官僚となることを志していたのである。帝國大學在学中の大正十年（一九二一）十一月、高等試験行政科に合格、同年の暮れに、内務省に採用されることが決まった。当時の内務大

臣は、床次竹二郎で、新採用者の面倒をみたのが、秘書官の後藤文夫であった。同期入省で仲が良かった人物としては、生涯の友情を保った桑原幹根<sup>(15)</sup>（のちの愛知県知事、全国知事会会長）や、川村秀文（のちの千葉県知事、川村学園女子大学理事長、三浦とは社会局時代に机を並べる）、小泉悟郎らがいた。翌、大正十一年四月、大学卒業と同時に内務省に入省した。

三浦が、社会改良に深い関心を寄せていたことは、内務省でも把握していたようである。入省後の三浦は、まずは滋賀県属として任地に赴き、翌年大正十二年四月、本省警保局所屬となり、半年後、岡山県理事官として、二年半を岡山県で過ごすことになる（十三年十二月の異動で、岡山県事務官）。

三浦を岡山県に配置した点に、内務省の意図が感じられる。岡山県は、全国でも、社会改良行政の進んだ県として認知されていた。弱冠二十五歳の三浦は、社会課長に任じられ、岡山県の人道主義的行政に関与していった。岡山時代の三浦の仕事をつたつ確認しておく、まずは、岡山県融和事業の管轄である。岡山には明治三十五年に備作平民会が結成されて以来、全国でもいち早く部落解放運動が始まった土地であり、特に大正年間に入ってから、大正デモクラシーの風潮のもと、運動がさかんであった。三浦は、社会課長・法学士として、岡山市国清寺で催された、中堅青年養成講習会（大正十四年二月十二日～十七日）に講師として壇上に立つなど、解放運動に尽力した<sup>(17)</sup>。もうひとつは、濟世顧問制度の維持・発展である。濟世顧問制度とは、土地土地の篤志家を県公認の濟世顧問に任命し、共同体の失業者や職業不適者の社会復帰をサポートするという社会改良制度のひとつであり、岡山県独自の制度である。ドイツ・エルバーフェルト市で実施されていた救貧委員制度をモデルとして、大正六年（一九一七）に制定された。この制度を、担当課長として、維持・管轄したことが、記録されている<sup>(18)</sup>。

大正十五年（一九二六）五月、岡山県での実績が評価され、三浦は、内務省社会局保険部事務官に任じられ、本省に戻るようになった。社会保険制度を充足させるという大任にかかわることになったのである。社会改良行政官として力量をふるう舞台が整えられ、三浦は社会局において、活躍することになる。そして、この本旨<sup>(19)</sup>とめて、長岡隆一郎、河原田稼吉、湯沢三千男、武部六蔵、といった三浦の運命をかえる内務官僚たち<sup>(20)</sup>にであうことになる。

## 註

- (1) 『武部六蔵日記』古川隆久ほか編、一七五頁。（芙蓉書房出版、一九九九）
- (2) ただし、大正四年に発行された教育実成会編纂の『教育家銘鑑』には、元治元年二月、和歌山市南甚五兵衛丁生まれ、と記載されている。
- (3) 南方熊楠中学時代の日記（明治十四年）、中瀬喜陽『南方熊楠、独白熊楠自身の語る年代記』、二二九頁。
- (4) 『南方熊楠日記』第一巻、九〇頁～九三頁。（長谷川興蔵校訂、八坂書房、一九八七）
- (5) 『南方熊楠日記』第四巻、九五頁。十一月九日の項。
- (6) 『南方熊楠日記』第一巻、九二～九三頁。
- (7) 大竹伊八・菅田茂・石山徳義「捲縮スフ 生産から生産まで」四二三頁～四二七頁、『高分子』Vol. 4 (1955) No. 9 所収。
- (8) 著書に、『人造繊維の品質改良に関する研究』（紡績雜誌社、一九四一）、『人造纖維』（生活科学新書、羽田書店、一九四三）などがある。
- (9) 明治三十六年（一九〇三）生まれ。和歌山県実業家松村政之丞、たきの三女、和歌山高等女学校卒。和歌山高女は、須藤丑彦が校長を務めていた学校である。
- (10) 『和歌山中学・桐蔭高校野球百年史』和・中・桐蔭野球部OB会編（一九九七）。三浦が卒業した後だが、和歌山中学野球部は全盛期を迎え、大正十年、十一年と、全国大会で優勝。史上初の夏連覇校となった。
- (11) 「我等」第一巻第三号（一九一九年三月）
- (12) 古川江里子『大衆社会化と知識人——長谷川如是閑とその時代——』、四十六頁～四十七頁
- (13) 当時内務省警保局で図書課長として検閲行政を管轄していたのは、堀切善次郎であった。堀切は、三浦と深い関係を生じた内務官僚というわけではないが、三浦が内務省本省にもどった大正十五年には、復興局長官に任じられており、社会局勤務の三浦ともそれなりに仕事上の関係があったことが推定される。
- (14) 「我等」第一巻第一号（一九一八年二月）
- (15) 長谷川如是閑「傾向及批判」、「我等」第一巻第三号、三五頁～三九頁。
- (16) 桑原と三浦の友情は、趣味の絵画鑑賞をきっかけにはじまり、生涯保たれた。戦後、サエグサ画廊で画廊主をしていた三浦を、名古屋短期大学の学長に招いたの

は桑原であり、ともに前妻を亡くし、その後再婚した際には、お互いの仲人をつとめるほどであった。

- (17) 『部落問題・水平運動資料集成』第二巻、四七〇頁～四七四頁。(三一書房、一九七四)
- (18) 『岡山県済世制度二十年史』岡山県社会事業協会